

かごしま生涯学習研究—大学と地域— テーマ「当事者として地域防災に向き合う生涯学習」

「災害・防災を報道するメディアの役割と課題—奄美豪雨 災害発生時のコミュニティラジオの対応の目撃者として」

MBC 南日本放送報道局報道部 北原 由美

はじめに

2010年の奄美豪雨災害時、MBCへの第一報は、あまみエフエムの代表・麓憲吾氏からのものだった。その後も情報のやりとりを続けるとともに、MBCではあまみエフエムの放送活動自体を取材し、ニュース等の番組で伝えた。以下、取材を通してあまみエフエムの災害放送を目撃した一人として、当時を振り返りたい。

あまみエフエムとMBCの関わり

そもそも、私と麓代表との関わりは、あまみエフエムの立ち上げ以前にさかのぼる。テレビの情報番組などを制作するディレクターだった私は、奄美の音楽シーンを伝える番組の撮影でライブハウスを経営していた麓さんと知り合い、その後もラジオ開局時などに特集を組むなど、たびたび取材をしてきたという経緯がある。

また、MBCでは積極的にケーブルテレビやコミュニティラジオ等の地域の様々なメディアと連携した番組制作を行っており、あまみエフエムにも定期的に奄美の情報を伝えてもらうなど、協力体制を築いていた。

奄美豪雨災害の取材、放送までの経緯

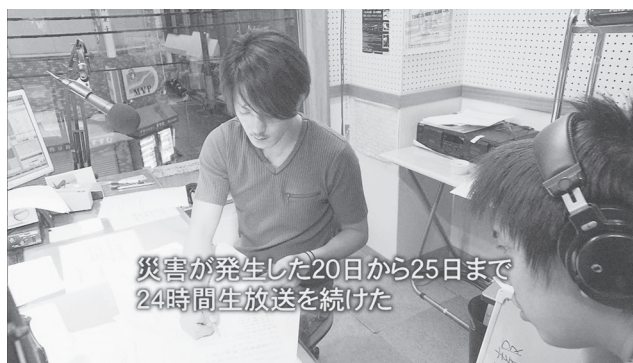
2010年10月20日午後1時、麓さんから衝撃的なメールと写真が届く。奄美市役所住用支所の2階から撮影したもので、道路は冠水し、郵便局の屋上に避難する人の姿や水没している車も確認できる。すぐに報道部のフロアに走り、局長に伝えた。

その時点で警察に被害情報などは入っていなかった。昼のニュースで龍郷町の土砂崩れと住用に130ミリ超の雨について伝え、「この時期にしては異例の大雨」とは認識していたものの、一過性のもものではとされていた。MBCの奄美支局に問い合わせても、支局のある名瀬では雨は全く降っていないという。「ただ、奄美は山ひとつ超えると雨

の降り方が違うこともある」と支局の記者。報道部では、直ちに支局の記者を住用に向かわせると同時に、本社の取材体勢も組まれた。とりあえず第一陣のカメラクルーが夕方の飛行機で奄美に入ることに。しかし、幹線道路である国道58号の寸断により、カメラクルーは空港から名瀬へ向かう途中で立ち往生となり、車中で一夜を過ごすことになる。支局の記者も国道の冠水で住用に入ることができず、本社では電話やSNSなどによる情報収集を続けた。

MBCテレビではこの日の午後からほぼ1時間ごとに、通常のローカルニュースや全国ニュース等で、被害の状況や交通・気象情報などを伝えた。あまみエフエムからは第一報以降も写真画像や情報が届けられ、番組に生かされた。

災害発生から3日後、MBCに第一報をもたらした、その後24時間体制で放送を続けるあまみエフエムの取り組みに報道デスクが着目。災害現場の取材チームとは別に、クルーを派遣、密着取材をすることになった。



あまみエフエムの災害時の 放送活動を取材して

あまみエフエムの放送態勢

私が奄美に入ったのは、災害が発生して3日後のことだ。22日の夜、クルーとともに鹿児島発のフェリーで向かい、

明けて23日の早朝に名瀬に到着した。奄美はやや落ち着きを取り戻してはいたものの、道路の寸断、通信の遮断で、情報はまだ錯綜している状態が続いていた。

午前6時前、あまみエフエムに直行。スタッフ数人が事務所に寝泊まりしていた。仮眠していた麓さんは起きるとすぐにパソコンを開き、メールをチェック。リスナーから送られてくるメールが大事な情報源だという。6時にはパーソナリティがスタジオに入った。私たちもカメラを回し、密着取材が始まった。ここから24日午後2時までの丸1日半、張りつくことになる。

あまみエフエムでは災害が発生した20日から通常の番組を全て災害情報に特化した放送に切り替えていた。当時のスタッフは11人。営業の担当者や事務方も含め全員で手分けして、情報の収集整理と放送の運行にあっていた。パーソナリティは3人。1人が約6時間を連続して担当、交代というローテーションを続けていた。声も枯れ始めている。しかし、災害から3日が過ぎた取材時も「島の人たちの不安がなくなるまで放送は続けたい」という麓代表の方針で、24時間特別放送の態勢は解かれていなかった。

以下、災害発生から3日後の10月23日から24日にかけて取材したあまみエフエムの放送活動の中で印象に残った場面を振り返る。

あまみエフエムの放送活動

(10月23日～24日)

伝えていたのは、被害状況や交通情報、安否情報から、災害ゴミの処理法まで。島民がその時本当に必要としているきめ細かい情報だ。いかに早く正確に、情報を届けるか。しかし、島ラジオの役割はそれだけではないという麓代表。取材初日のインタビューでこう話している。「(大切にしているのは) 安心・安堵の時間を作ること。伝えるべき情報



は伝えるんですけども、その中でも、できるだけ安心・安堵を注いであげたい。」

その言葉通り、スタッフは過酷な状況下にも関わらず、アイデアを出し合いながら番組を進行していた。

例えば、いまだ学校から帰ることができず体育館に避難している住用の東城中学校の生徒たちへの応援メッセージが届いた時。パーソナリティの中原優子さんが、生徒たちが以前、番組に出演していたことを思い出す。「東城、来たんじゃない？来たがね。あんたなんかの後輩ち言って、ここに。」中原さんの言葉を受け、卒業生でもあるディレクター元井庸介さんが記憶を頼りに、急いで当時の音源を探し出す。そしてわずか数分後に、メッセージとともに中学生たちの歌声を放送したのだった。

「子どもたちの歌声をラジオに乗せることで、避難している生徒たちを元気づけたかった」と、中原さん。生放送中にも関わらず、臨機応変に対処するスタッフのスキルと志の高さを感じる1場面だった。



災害発生から3日たち、「安心・安堵を届けよう」という方向性はさらに強くなっていったように思う。島唄などの音楽もかけ始め、24日には、元ちとせや中孝介といった奄美出身のミュージシャンたちの曲を、激励メッセージとともに流していた。

ある人物の行方も追っていた。人気番組の出演者で、方言による語り口がユーモアあふれる名物おばあ。連絡がとれず安否を気にかけていたところ、やっと電話が繋がった。おばあの朗らかな声を届けようと、電話をそのまま放送に乗せる。

中原「電話がつながりそうです。おばあ？」

おばあ「はげー、興奮ど。公民館でふた晩。山が崩れて、泥まみれよ。泥んことりかた。」

中原「はげ、おば。あまり無理しんしょんなよ。どうか、きばりんしょれよ。」

被災しても変わらないおばあの明るい声に、スタッフにも笑顔が広がった。

放送活動を続けるスタッフ

あまみエフエムのスタッフにも、被災者はいた。ディレクターの元井庸介さんの自宅は、最も被害が大きかった住用の城集落にある。しかし、局で寝泊りを続け、玄関まで水につかったという自宅にはまだ帰っていないという。自宅が被災したのを知ったのは、災害当日の夜。家族から留守電が何本も入っていたが、携帯電話をチェックする暇もなかった。テレビに自宅前の様子が映り、自分の車が水没している様に呆然としたが、翌日に着替えを届けに来た父親が家族全員の無事を知らせてくれたため、局に残り放送活動を続けることにしたと、語ってくれた。

パーソナリティの中原優子さんは、災害放送の経験などないスタッフに伝えるべき情報を教えてくれたのはリスナーだったと話した。安否確認はもとより、救援物資はどこに送ればいいのか、土のう袋はどこで手に入るのか、などの問い合わせに基づき、関係機関に取材、さらにはリスナーにも情報提供を求め、それらの情報を整理して放送するということを続けたのだ。

麓代表は、開局以来ここまでリスナーとやりとりしたことはなかったと言い、「地元のラジオ局でしかやれないことはたくさんある」と改めて感じたと言った。

リスナー・島民の反応

5日間でリスナーから届いたメール・FAXは800通を超えたという。当初は各地の被害状況等の情報提供が多かったようだが、災害発生から4日後の取材時には、被災している島民、そして放送を続ける局への応援メッセージが増えていた。

局に直接やって来る人も多かった。差し入れや寄せ書きなどを持って、励ましやお礼を言いに来る人たちが。

コミュニティラジオならではのリスナーとの距離の近さを感じるとともに、奄美の人たちの「結い」の心を垣間見た気がした。



取材内容のMBCでの放送

密着取材を24日の午後を終え、夕方の飛行機で鹿児島に戻った。そのまま編集作業に入り、翌25日夕方の「MBC ニュースナウ」というニュース番組の企画として放送した。VTRの尺は5分40秒、タイトルは「島民を繋いだ不眠不休のラジオ局」。また、同様の特集を2日後の27日20時からの「どーんと鹿児島 緊急特番 奄美豪雨災害」でも放送した。

災害時のメディアの役割と課題

2010年奄美豪雨災害時のあまみエフエムの放送活動は、メディアの災害・防災報道への様々な教訓を含んでいる。以下、当時の報道デスク・有馬正敏に聞き書きしたMBCの報道体制をふまえた上で、メディアの役割と課題を考えた。

MBCはかつて災害の被災者となった経験がある。1993年の8・6豪雨だ。甲突川の氾濫等によって局舎は浸水。機関設備に被害が及ばないように社員総出で排水作業を行いながら、災害放送を続けた。

この8・6豪雨は放送事業者である我々に大きな課題を残した。それは事前に発表されていた気象予報をきちんと読み解けず、県民に伝えきれていなかったことだ。当時は気象予報士の制度がなく、社内に気象予報士の専門家はいなかった。さらにこの年は梅雨の長雨で大雨洪水警報が頻発、この時もいつもと同じような警報の伝え方だった。

この頃までの災害報道は、被害が起きた後に被害の状況を伝える「事後報道」が多かった。しかし、60万人都市が被害を受けた未曾有の災害を体験し、「情報で県民の生命、財産を守る」という放送局の使命を再認識するとともに

に、「事前報道」を実践するため、MBCは1995年に全国の放送局に先駆けて気象事業所としての許可を受け、以来、自社の気象予報士による独自の気象情報の提供を続けている。また南北600キロに及ぶ放送エリアをカバーするために、気象予報士だけでなく、記者も絶えず最新のデータをチェックし、住民の防災行動に資する情報を伝えることに務めてきた。

しかし、こうした私たちの取り組みや想像を上回ったのが2010年奄美豪雨だった。奄美豪雨は「記録的な豪雨」であったと同時に「局所性を有した短時間の豪雨」だった。

刻々と変化する状況を把握し、的確な情報を届ける－災害時のメディアの役割は県域放送局もコミュニティFMもその本質は変わらないが、あまみエフエムの放送活動は地域に根ざしているからこそその強みがあった。住民に特化したミクロな情報は、コミュニティFMが得意とする領域だ。私たち県域局は、被害範囲が広がるほど情報もマクロ的になっていく。こうしてみると、災害時にはそれぞれの特性に応じた役割があるともいえるが、一方で、あまみエフエムのリスナーが他の市町村の被害情報を知りたい、あるいはMBCのリスナーが奄美の細かい情報を知りたいといったニーズもあるかもしれない。多様なニーズに応えようとするならば、局の垣根を越えて、互いの情報を交換し生かしていくことは有用だろう。そのためにも、普段から連携し、関係を構築することが大切だと考える。

おわりに

今、振り返っても、開局わずか3年目、スタッフ11人のラジオ局があれだけの放送をやり遂げたことに頭が下がる。あまみエフエムの真摯な放送活動を目の当たりにし、私にとっては、取材をしつつ自らの仕事を省みることもなる2日間だった。

災害時にあって、麓代表言うところの「安心・安堵の時間を作る」とは、島民に寄り添う放送を続けることなのだと思う。島のイントネーションで、まるで家族や友人に語りかけるような放送は、孤立した人たちをどれだけ励ましたことだろう。なじみ深いふるさとの歌がラジオから流れてきた時、暗闇の中でただ夜が過ぎるのを待つ人たちはどれだけ勇気づけられたことだろう。

「島ツチュの島ツチュによる島ツチュのためのラジオ」を標榜するあまみエフエムは、平時の番組作りから、どこ

に向けて何を放送するのがシンプルで明確だ。ひるがえって自分はどうか。情報を届ける先にいる人たちの顔を、暮らしぶりを思い描いているだろうか。情報をアウトプットすることに追われてはいないか。

2010年の奄美豪雨災害以降も、東日本大震災や熊本大地震など、大きな災害が日本を襲ってきた。そしてその度に、災害報道のあり方に関して議論がなされる。マスコミには正確な情報を広く伝える責務があり、早く伝達する努力も放棄してはいけない。しかし、取材手法によっては独善的だという批判もしばしば起きる。メディアの特性に応じ、役割分担をする必要もあるのかもしれない。議論はまだまだ途上にある。

けれど、誰のために報道するのかということが明確であれば、報道すべき事柄はおのずから見えるはずだと、奄美大島の小さな放送局が教えてくれる。